

復刻版地図帳で 昭和という時代を眺める

地図エッセイスト 今尾 恵介

▼古い地図帳はただの古紙ではない

昭和52年（1977）に時刻表の復刻版が出た。これを当時高校生だった筆者は清水の舞台から飛び降りる思いで購入した。

その頃の5000円は「大枚」であったが、出した甲斐があった。すでに廃止された数多くの私鉄が載っていたり、新幹線が開通する前の特急「こだま」をはじめ、多種多様の急行や準急列車などで賑わっていた東海道本線のページを見ながら、まさに寝食を忘れたものだ。中学時代から地形図を集め、「線路跡ではないか」と気になっていた道路がやはり鉄道であったことがこの復刻版で判明した時の感激は今でも覚えている。

「厳密に」いえば、地図というものは出た瞬間に古地図になる。それどころか校正作業が終わった翌日に開通した道路は載っていないわけで、出る前にすでに古地図になっている。だからといって「最新〇〇地図」をウソツキ呼ばわりしてはいけない。家族で撮ったスナップを、古いから価値がないと捨ててしまう人がいないのと同じだ。

地図は「その時」の土地における、それぞれの時代の貴重な記録なのである。とくに地図帳は数多くの主題図やグラフ、図解などがその時代の社会の重要テーマを取り上げており、ある意味で非常に「立体的に」時代を捉えることのできる教材となり得るのだ。

さて、戦前の旧版地形図というのは意外に多く出回っているのだが、意外なことに膨大な部数が出たはずの地図帳が、なかなか古書店に出てこない。教科書は処分しても地図帳だけは大事にとっ

ておく人が多い、という表れだろうか。

▼戦前・占領下・高度成長という3時代

『復刻版地図帳 地図で見る昭和の動き』は、その滅多に出ない地図帳の中から昭和9年（1934）、昭和25年（1950）、昭和48年（1973）という3つの時代を選び、復刻したものだ。いずれも中学校の地図帳であるが、昭和9年の版は旧制中学で「帝国之部」「世界之部」の2分冊になっている。

この3つの年代はそれぞれに特徴がある。

まず昭和9年といえは「満州国」建国の2年後であり、この間に日本は五・一五事件があり、国際連盟脱退、ワシントン海軍軍縮条約破棄と孤立を深め、軍国主義に大きく傾いていった頃である。そして日中戦争へ突入から太平洋戦争に発展、やがて破局を迎える。その戦後の占領下の状態が昭和25年だ。この地図帳には奄美や沖縄、そして北方領土も載っていない。

そして昭和48年版。これは沖縄が復帰し、札幌で冬季オリンピックが開催された翌年で、まさに高度成長の時代だ。全国に「新産業都市」が計画され、まだバラ色の未来像が描かれた時代であった。何でも右肩上がり、筆者の通った横浜郊外の中学校では校庭にプレハブが建てられ、1学年に14クラスがひしめいていたものだ。

こうして見ると「昭和」とはなんと激動に満ちた長い時代であったことだろうか。

▼軍事からレジャーまで多面的に時代を実感

各分野の執筆者によって書かれた解説書がまた興味深い。項目を挙げてみると、世界情勢、日本

と世界の経済、日本の軍事とかつての植民地、鉱業の盛衰、農業の変化、高度経済成長への道、変わる海岸線、交通網の発達、レジャーの変遷、人口の移動、鉄道の変化、地域と昭和（各地方ごと）、地図表現の変化などなど多方面にわたっており、解説者による視点の違いもあって、地図というものが、いかにさまざまな角度から読み込むことのできる素材であるかを教えてくれる。

地図帳はそれだけでは「思想を表明」する性格のものではないが、こうして3時代を並べてみると、地図というものが、いかに時代を反映したものであるかが浮き彫りにされる。

たとえば見返しに印刷された国旗ひとつ見ても、イタリア国旗は王制が廃止されて中央の紋章が消えているし、政権をとったばかりのナチス・ドイツもやはり国旗を変更させた。

一応は独立国としながらも事実上は傀儡国家であった「満州国」の扱いは、その建前と本音の調

整が微妙だ。実際には多くのページ数を割き、また新京（現・長春）など主要都市図も挿入しているし、「世界之部」と「帝国之部」のどちらにも掲載されるなど、その性格を雄弁に物語っている。

昭和48年版では、有明海の湾口を締め切って淡水化してしまおうとする壮大無比な計画図も載っているが、これに比べれば現在大問題になっている諫早湾の干拓などモノの数ではない。この図を見ただけで、相当に破壊的な事業が「バラ色の未来」への計画として進められていた時代の雰囲気伝わってくる。地図が時代を反映する、とはこのことである。

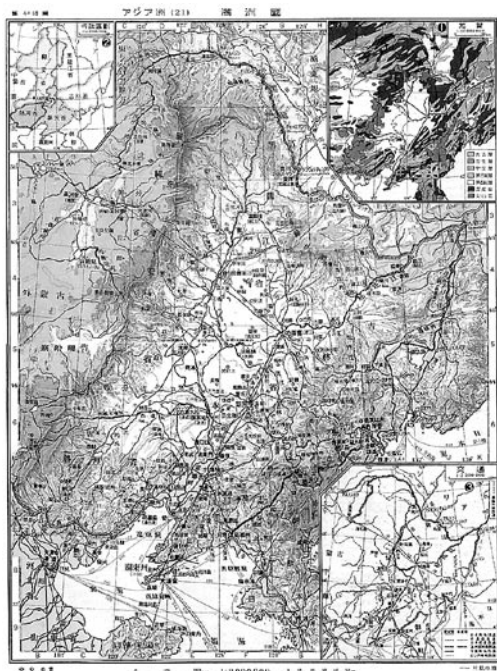
ここではごく一部しか紹介できないが、解説を傍らに置きながら各時代の地図帳のページを繰っていけば、何気なく見落としがちなあれこれに気付かされるし、まだまだ解説者も気づかなかった大発見があるに違いない。

▼お母さん・おばあちゃんの地図帳

昭和9年の地図帳を使ったのは大正11年頃の生まれだろう。やがて彼らは中学を卒業し、戦場から還らぬ人となった割合が最も多い世代である。ご存命の方はもう80歳を超えている。ちなみに昭和25年版を使ったのは今年の誕生日で66歳、48年版を使った世代は今年43歳になる。現在の中学生でいえば、ちょうどお母さんが使った48年版、おばあちゃんの25年版、といったところだ。

現行の地図帳と合わせれば「4世代」が揃うことになるが、各世代で教わった内容はどのように変わっただろうか。また共通していることは……。

地図に載っていることは真実、と信じている人は意外に多いのだが、「真実」は時代ごとに微妙に変化していくものだ。その変化の面白さを実感できることも、この地図帳復刻版の効用である。ついでながら、昭和生まれの最後の中学生が今年（2004年）の3月で卒業していった。



昭和9年 世界之部 第七四圖 満洲国